

# さわやか通信



## 新棟移転で輸血細胞治療部は？

輸血細胞治療部もオペ室の上、2階の新棟に移転します。輸血部門はオペ室との連携が非常に大切であり血液製剤を送るにも上下の位置関係が重要になってくるわけです。移転に伴い、今年の年末年始はどうなるか・・・？楽しみの反面不安な今日このごろです。

さて、**新棟で問題になっていることは、血液製剤の搬送方法です。**オペ室はダムウエーターがなくなり材料部と共通の直通エレベーター（ちょっと不安）、病棟は大型エアシューターかメッセージャーによる搬送しか手段がありません。さらに、エアシューターで一度に送れる製剤はRCC2単位またはPC製剤のみで、FFPや血漿分画製剤は無理なのでメッセージャーでの搬送方法がこれからの最重要課題です。ただ悲観的なことばかりではありません。**新棟移転時に念願の輸血オーダリングシステムそして認証システムの稼働が**予定され、伝票の煩雑さや手書きによる記入ミス、製剤取り違えの防止など、より安全な輸血実施が可能になり、先生方も輸血履歴がオーダ側で確認できるように

なります。

また、新棟では**オペ監視用液晶テレビが設置され手術室と術野を見ることで迅速な輸血準備が可能**になることで、患者の安全と術者の安心につながり、止血が確認できることで、血液センターへの発注を調整することも新棟での楽しみの一つです。

現在輸血部内の冷蔵庫・冷凍庫8台を温度管理システムを使用し集中管理していますが、新棟ではさらに**オペ室とICUの冷蔵庫・冷凍庫を輸血細胞治療部で24時間一括集中管理**出来る様になり、製剤の保管についてもより安全になると期待しています。**新棟のもう一つの大きな目玉としては、幹細胞処理・輸血遺伝子検査室が新たに造設されることです。**オペ室と連動したClass10,000の処理室は診療の先生方のお役に立てることと思います。こんなはずではなかったと後悔しないように、細かいチェックをして詰めていきたいと思ひます。

(輸血細胞治療部 内山幸則)

## 『児童文学を書いています！』

趣味、とは既に言い難くなっているのですが、児童文学を書いています。書き始めたきっかけは、8年前、とある童話賞の公募にふと応募してみようと思ひ立ち（半分賞金目当てでした）、思ひがけずそれが入賞し、なぜか出版社の方の目にとまり、本になってしまったことからです（『ゴリラのスターライト』ひくまの出版）。その後は、公募に入賞したり、しななかったり（笑）。それでも、ごくたまーに、出版社から依頼があり、アンソロジーや雑誌に短編を載せていただいたりしています。お話の中の登場人物には、自分の知っている人を投影させたりしていますので、私の周りの人々はくれぐれもご注意ください。

昨年、本学の大学院生になったことで、書く時間はほとんどなくなりましたが（なので、趣味とは言い難いのですが）、依頼があれば書いています。アイデアさえあれば、短編10枚ぐらいなら、2時間あれば書けます。ただ、アイデアを思いつくまでが大変なのです。



よく、その発想はどこから、と聞かれますが、お話をつくろうと思ひながら生活していると、あそこの路地を入っていった猫はこれからどこへ行くんだろうとか、めちゃめちゃ想像してしまい、自分でおもしろいオチを思いつくと、うれしくなります。

**普通の人が見逃してしまうようなことも、何か見つけてやろうと頭が勝手に働き始めます。**自分の今の生活がつまらないと感じている方には、ぜひ、お話を書くことをお勧めします。**平凡な日々の生活が、急に輝いているように思えてきますよ。**

最新作は、家の光協会（JAの出版部門です）発行の『ちやくりん』2月号に掲載の短編です（絶賛発売中）。タイトルは、『赤鬼は、また泣いた』。書店では売っていませんが、お近くのJAでお求めください！

(精神神経医学講座 新村干江)



## ～検査部紹介～

検査部には、患者さんに直接触れて検査をする**生理機能検査部門**と、患者さんから採取された検体を扱う**検体検査部門**とがあり、検体検査部門はさらに**血液一般検査、生化学免疫検査と微生物検査の3部門に分かれています。**

生理機能検査部門では、心電図を始めとして、脳波・呼吸機能検査・各種超音波検査など、患者さんから直接生体情報を得る検査を実施しています。腹部・心臓・頸動脈のさまざまな超音波検査にも技師が関わるようになり、検査件数の増加もみられます。心電図やスパイロ検査も随時検査として臨床の要望に応えています。

血液一般検査部門や生化学免疫検査部門では、血液や尿などの成分を測定しています。大量にしかも、効率的に検査を実施するために大型自動分析装置と検査情報システムを駆使した検査体制をつくりあげて運用しています。適正な病態把握ができるように、患者さんの検査結果は、個別に精度管理システムで多角的にその妥当性を点検して報告しています。外来診療においては診察時までには検査結果を報告する診察前検査を

実施していますが、その依頼件数は、**外来検体の6割**にも達してきております。午前中に集中するため、現行の大型自動分析装置では十分な対応ができない時もありますが、1秒でも早く報告できるように各担当部門は努力と工夫を続けています。

さて、検体検査の結果に関して『**同じ項目を測定しているのだから、どここの病院でも同じデータが出るはず。**』と、思われがちですが、**必ずしもそうはいかない現実**があります。それは、施設ごとに異なる測定機器、測定試薬、測定方法を用いているからです。この状況に対して臨床検査の分野では、全国的な検査データの標準化への取り組みがなされており、どここの医療機関でも同じ**“ものさし”**（標準化された測定・統一された基準範囲）を用いた診療を目指し、当検査部もこの標準化事業に静岡県基幹施設として参加協力しています。現在の医療の中で、臨床検査は患者さんの疾病の状態を客観的に評価するのに欠かせないものの一つです。**私達は、その自覚と責任を持ち、患者さんや他のスタッフの役に立つ検査部でありたいと思っています。**（検査部 金子誠）

## 腫瘍センターの取り組み

腫瘍センターでは、**がん診療連携拠点病院の事業の一つ**として、医療従事者向けの研修会の運営を行っています。この研修会は、県西部浜松医療センター、聖隷三方原病院、聖隷浜松病院と浜松医大の四病院で、県西部地域（西遠、北遠、中東遠）を巡回して研修を行うというものです。平成19年度からスタートし、去年は浜松アクトシティ、天竜壬生ホール、御前崎市立総合病院にて「がんの化学療法」をテーマに研修会を行いました。

今年度ですが、まず四病院間で開催月、会場、研修会のテーマ、講師等を決めて提出します。同じ地域での開催月、テーマを重複しないよう留意しつつ、お互いに情報を交換しながら準備を進めていきます。とはいえ、四病院で三会場、合計12回も一年の間で研修会を開く訳ですから、そんなに開いて参加者があつまるだろうか？というのが実際悩みどころです。**今年は「胃・大腸・食道がんの治療」**をテーマに、浜松アク

トシティ、袋井市民病院にて開催しました。袋井市民病院では、袋井病診カンファレンス特別講演として参加させていただきました。平日の19時半にこちらの講演が始まり、20時半で終了、その後症例検討会を開始…と、夜間に、食事をとる余裕もほとんどないまま、遠方はるばる出前出張する講師の先生も大変ですが、**診療終了後に会場に出向き、研修を受けられる医療従事者の方々も大変…と皆さまの労力と熱意に頭が下がる思いです。**

先方の担当者の方にも「非常に有益な講演で、出席者一同大変楽しく勉強できた。来年についても、当院での開催を。」という有難いお言葉をいただき、がん診療連携拠点病院としての役割を少しでも果たせたかなと思います。

**残すは浜松赤十字病院での研修のみ**となりました。北遠地域は、去年は二俣町にある天竜壬生ホールで行いましたが、参加者はほんの一握りの人数で本当に寂しい限りでした。ぜひ今回の浜松赤十字病院での研修会にも足を運んでいただければ幸いです。よろしくお願いいたします。（腫瘍センター 太田 恵実子）

## 7対1看護配置 達成の見込！

平成18年度の診療報酬改定で7対1看護配置が新設され、看護師確保のための争奪戦が起こりました。当地区、当院では経費をかければ人が集まるとは考えにくく、『計画的・段階的に増員します』と判断し、アクションプランを押し進めてきました。

看護職員に多くの負担をかけましたが、皆の理解と協力、そして努力により、**21年度達成見込み**と言えるところまでできました。あと一息、頑張りましょう！（看護部長 桑原弓枝）



12月4日号 掲載の《怪童クラブ》の面々 紹介です！